

JN[実業の日本] 2002年 JAN.

movimento **intervista**

小島慶子=聞き手

INTERVIEWER KEIKO KOJIMA

PHOTO YOKO HANAKI

COMPOSITION YUICHI OHTSU

シブサワ・アンド・カンパニー代表取締役 **渋澤 健**

信用は“人と人のつながり”にあり！

小島 ヘッジファンドという言葉聞いて、身構えてしまう人は多いと思います。この本を読む前は、私も身構えてしまう側のひとりでした。ヘッジファンド=投機の怪物、というようなイメージが先行していたんです。

渋澤 秘密厳守の下にヘッジファンドの業務が成り立っていることもあって、なかなか、ありのままの姿が報道されることは少ないんですよね。歪曲されたものになると、「東南アジアのどこかの国をヘッジファンドが席卷しようとしているんじゃないか」、とする陰謀説まで浮上してきますから（笑）。

小島 では、この本を通して、世間の抱く誤解をなんとか払拭しようというお気持ちがあったんですか。

渋澤 それはありました。現在の低い長期金利や低迷する株価の影響もあって、投資家の目はヘッジファンドに向けられています。この状況下でヘッジファンドの真実を知りたいという声は当然高まりをみせていますし。

小島 なるほど、そこで投資家の皆さんから、何を目印にしてどこに任せればいいのかという疑問が出てくると？

渋澤 その通りです。一般的に、多くの人注目するのは組織の看板ですよね。銀行を選ぶときはとくにそうかもしれない。しかし、ヘッジファンドにおいては看板はそこで働く「人」になるんです。投資家はその「人」とパートナーになり、自分のお金を運用してもらおう。すると、お金を預ける相手を信用したいと考えるのが人情ですよね。

小島 本書には、ヘッジファンドに勤務する方々のエピソードが綴られていますよね。渋澤さんがいらした「ムーア・キャピタル」で働く、彼らの親しみやすい印象が伝わってきました。

渋澤 どうですか、以前のイメージとは変わったでしょ？

小島 怪物は行きすぎたイメージ。温かな職場の雰囲気が伝わってきます。

合言葉は“リスク・マネジメント”

小島 初めてこの本を手にしたとき、タイトルを読んで思わず首をかしげてしまいました。渋沢栄一とヘッジファンド、両者はどのように関係しているのかな、と。でも、ページをめくるにつれて、謎は解けて行ったんです。

渋澤 リスク・マネジメントを危機管理と和訳すると「なんだか難しそうだな」と思われるかもしれませんが。それは日常、体験していることに他ならないんです。たとえば、車の運転もそう。ポイント A から B まで車で行く場合、まっすぐ進路をとれば最短距離で目的地に着きますよね。だけど、そこには不測の事態もある。車道に人が飛び出してきたり、道が通行止めであったり。そういった場合、「まっすぐ進む」というしがらみを捨てなければなりません。また、タイミング、を計って、アクセルとブレーキを使い分ける必要も出てくる。こうした決断も立派なリスク・マネジメントなんですよ。

小島 なにも、会社を経営している人や、ヘッジファンドのマネジャーだけに必要なものではない、“普遍的な意識”であると。

渋澤 ええ。渋沢栄一はリスク・マネジメントという言葉が存在する以前からその本質を実施していたのです。江戸時代末期に生まれ、明治維新を経験した彼は、激変する時代にいち早く対応した。日本で初めての株式会社や初めての銀行の第一銀行を創設した。おそらく彼の目標は日本という国家を前進させることにあったのでしょ。

小島 そしてヘッジファンドの仕事は、変化し続ける市場と常に向かい合ってリスク・マネジメントし利益を上げるものである、と。両者ともリスク・マネジメントのプロなのだ、という共通点がありますね。

渋澤 ええ。それと、場合によってリスクはチャンスにもなりますし、悲観して受身になってはもったいない。先を見据えていれば、自ら退くというの確かな選択になるわけです。だから、リスク・マネジメントはおまかせではない能動的な意識であると言えますね。

小島 本の後半では渋沢栄一さんが残された家訓が引いてありますが、子供の教育についても結構書かれていますね。

渋澤 渋沢栄一はかなり子供好きであったようです。子供の教育は同族の盛衰に関わる問題としてしっかり意識するようにと家訓には書いてありますね。われわれの未来ですから。

常識を支える 3本の柱

渋澤 100年も前の家訓ですが、なかなかどうして、現代でも通用すると思いますよ。「常識」について書かれたものがあつたんですが、その「常識」は“知・情・意”に依るものである、と。知は知識、情は感情や愛情、意は意志とか行動のことだと。やはり、知識だけでは「常識」ではなく他人に認めてもらえないんですよ。子供にはこの「常識」を学んでもらいたい。でもね、いざ自分が親として子供に教えるとなると、難しい部分もあるんじゃないかな・・・。

小島 未知の領域ですか。

渋澤 子供が成長するにつれて、どの学校に入学させればいいのか、公立か私立かそれと

もフリースクールか海外か、いろんな迷いがでてくるでしょうね。

小島 きっと、その都度リスク・マネジメントしていくんですね。

渋澤 うまい具合にリスクをチャンスにできればいいけれど（笑）。多くの人にとって、人生で変わらぬ目標とは幸福ですよ。もちろん思い描くものは人それぞれでしょうけれど、そこにだどりつくには同じリスク・マネジメントを繰り返すのだと思います。

こじまの対談後記

渋澤さんは今回の執筆にあたって初めてご先祖様のことを調べられたそうですが、栄一氏にとっても親近感を抱いているご様子。写真撮影でたまたま栄一氏の銅像のそばを通った時には、何度もそちらを振り返っていらっしゃいました。素直で尊敬できるご先祖様がいらっしゃるっていいもんだなあ、とちょっと羨ましかったです。

『渋沢栄一とヘッジファンドにリスクマネジメントを学ぶ』日経BP社 1600円

近代資本主義の始祖と呼ばれる明治時代の実業家渋沢栄一と、投機集団と呼ばれるヘッジファンドとの意外な共通点とは。人同士の信頼関係の本当の意味を探り続ける著者の信念に揺り動かされる。

聞き手・小島慶子 TBS アナウンサー。1972年7月オーストラリア・パース市生まれ。学習院大学法学部卒。「回復！スパスパ人間学」（毎週木曜19時～）司会やTBSラジオ「アクセス」（月～金曜22時～）のナビゲーターなどで活躍中。

しぶさわ・けん 1961年生まれ。小学2年生からアメリカで過ごしテキサス大学へ。84年日本国際交流センターへ就職。翌85年UCLAのMBA経営大学院へ入学。87年卒業後、ファースト・ボストン証券会社へ入社。88年JPモルガン銀行、92年同証券、94年ゴールドマン・サックス証券、96年ムーア・キャピタル・マネジメント・ニューヨーク本社へ転職、翌97年同社東京駐在事務所代表に。2001年春、ムーアを退職し現職に。渋沢栄一の5代目の子孫にあたる。